

Lowell の Thoreau 論と Thoreau の名声

川 津 孝 四

I

James Russell Lowell は Thoreau と同時代の者の内でも Thoreau をいち早く批評した人であるが、彼が1848年に出した *A Fable for Critics* 中の詩の中の二つの blank で暗示している人物のいずれが Thoreau であり、いずれが Thoreau の親友 Ellery Channing であったかは問題であるとしても、Lowell のいう Emerson の数多くの模倣者達の中のこの二人と想われる人物を“——”で表して Emerson の pocket をさぐったり、その果樹園の風で落ちた実を拾ってるカリカチュアを描いている。また Thoreau の *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) が出ると Godey's *Lady's Book* 中の匿名の一批評家はそれを Whittier の糟粕とみ、London の *Athenaeum* の今一人の匿名批評家は「Carlyle と Emerson の最悪の亜流」の一つとして片付けた。

Henry David Thoreau が今日のようにアメリカ文学史上に高い地位と名声を得るまでには、容易なことではなかった。生前はもとより死後もなかなか認識されなかった。彼の生涯と作品に対しては色々多くの批評が書かれているが、本当に彼の真意を理解していたものが少なく、公正充分な鑑賞が欠けていたり、種々な誤解もあつたり、批評家によってはその批評の底に個人的な感情の行き違いや偏見さえあつたと見られるにも拘らず、それがなかなかの批評家であつたため、長くその批評が他の批評家達や文学史家達や一般読者達にも強く影響していた。こんな有様ゆえ Thoreau はその生前にしる死後にしろ、ブームなんてものではなく、その真価が世人に認められるには相当年月を要した。でも一步一步 Thoreau の真価は明るみに出て来た。

Thoreau の葬式の時、その頌徳文中で “the country knows not yet, or in the least part, how great a son it has lost.” と嘆いた Emerson 自身ですら Thoreau の真価をまだそれほど明確には認識していなかっただろう。まして Emerson のその頌徳文を読む大方の読者達は、葬式に際して、それにふさわしい最大限の讃め言葉として割引して考えたであろう。

Lowell の多分に個人的な攻撃は余程わざわざいしたと見えて、Ellery Channing や Frank Sanborn のような伝記家達が Thoreau の生涯と作品について親愛をもって、忠実に顕彰したとはいえ、それ等の人々でさえ、Thoreau の真諦はまだよくつかめてなかったようだ。

Thoreau のことを “oddity” とか “Yankee Diogenes” とか “rural humbug” とかいった普通の評価に対して、異議を称えた人は段々あった。Lydia Maria Child は “Simple grandeur of Mr. Thoreau's position.” のために議論したし、George Eliot にしても 1856 年一月には *Westminster Review*, vol. 65. (302—3) で *Walden* からの抜粋まで添えて短評紹介しているし、H.A. Page の *Thoreau: His Life and Aims* (1877) は相当よく Thoreau を世人に理解させたし、Salt の *Henry Thoreau* 伝 (1890) など特によく書いている。

然し Thoreau の真価が本当に認められて、Emerson の予言が割引なしに正当であることを立証したのは 20 世紀になってからであり、それには John Albert Macy や Mark Van Doren や Norman Foerster や Raymond Adams や Francis O. Matthiessen や Reginald Cook のような学究的な解説者や批評家があずかって大いに力があつた。

かくして Thoreau は “naturalist” とか “minor essayist” とか “skulker” とか “disciple of Emerson” とか “stoicism” とかいう言葉にとらわれ、わずらわされることなく、彼の真諦が認められるに到った。

II

Lowell と Thoreau とはある原因で感情的に不和となり、それが Thoreau に対する Lowell のひどい批評の一因となったと色々な批評家が指摘しているので、その原因が果して何であったか考究してみよう。

Lowell は “*Atlantic Monthly*” の早い頃の編集者であったし、Thoreau はその第一巻の寄稿者であった。Thoreau が第二巻の為に送った “*Chesuncook*” において Maine の森の松の木のことについて書いた

“It is as immortal as I am, and perchance will go to as high a heaven, there to tower above me still.” という文を編集者 Lowell は削除したのである。作者はそれに反対憤慨して、その後どんな原稿も送ろうとしなかった。

この事は、William Ellery Channing の *Thoreau, the Poet-Naturalist* に出ているし、Sanborn の *Life of Henry David Thoreau*, にも書いてある。

Thoreau がその件について 1858 年 6 月 22 日付で編集者 Lowell 宛に書き送った手紙があるが、それには、校正刷を見て、削除されているのを知って驚いた。原稿に手を加える権利もないのに、賤しく、卑怯なやり方で省略していることは許せない。これは侮辱だ。八月号には削除したこととその箇所を示して、省略した文を載せて欲しい。そしてこんなことをするものには今後一切協力出来ないと書いている。

かく Thoreau はひどく憤慨したようである。

今 Thoreau 全集の *The Maine Woods* 中の *Chesuncook* を読んでみると、その削除された部分はもとの原稿通りに掲載されているが、前後の部分から見てやはり削除してはならないものである。あの削除部分の直ぐ前の辺りでは松の木が切られて材木として積み重ねられたり、テレピンをとられているのを見るより、詩人は生きた木として見るのが好きだ、材

木切出し人が森を行くと全ての松の木が身震いして溜息をついているように想われると、樹木の living spirit に同情をしているのである。これを唯 sentimentalism と片付けてはならない。彼自身自分の手で Walden 池畔の松の木を切って小屋を建てた位だから、木を切ることを否定するのではない。人間の生活に利用することはもとよりよいのであるが、生きた松の木になってそれに同情する詩人の心を述べたのだ。そして、あれが削除された主な理由は恐らく、「それは自分と同じように不滅だ」といった点にあると思うが、かく Thoreau が自分を不滅だと思っていることがけしからん、また、松も不滅だというのもけしからんと編集者は考えたのであろう。しかし Thoreau は自分が文人として偉大でその作品が不滅だと思っていった訳ではないだろう。人間の生命の尊さを感じしかもその生命が大地否この天地の偉大な生命に根ざしていることを悟っていたからこそかくいったのであろうし、その生命という問題になると人間だけでなく、動物も植物も含めて、あらゆるものの生命の神秘さと尊さを知っていたからこそかくいったのであろう。それだからあの部分は非常に大切な部分で削除されたことは意外であり、憤慨せざるを得なかったのであろう。

この削除の問題の外にも色々 Thoreau にはこの編集者が嫌いになる原因があったらしい。例えば 1860 年に John Brown についての Charles Norton の全く不適当な批評を *Atlantic* に掲載することを承認したこともその一つであろう。

Atlantic の第九巻に “Walking” に関する Thoreau の愉快的随筆、続いて彼の他の essay が第10巻第12巻及び第14巻に掲載されたけれども、それは Lowell が “*Atlantic Monthly*” の編集をよして、新たに publisher の J.T. Fields が編集者になり、Fields は自分の雑誌の魅力として、この良心的な天才 Thoreau の価値を知ったからで、第九巻が出たのは Thoreau の死後数週たったのことであった。

かく Lowell が編集している間は絶対に寄稿をしなかったのである。

Lowell は唯こうした経緯で Thoreau に対して先入観をもっていたが故に、あんな不当な批評をしたのであろうか。心の底にあることが色々な形になって表われてくることは勿論首肯出来る。しかしそれだけではない。この二人は人間として余りにも違った type の人であった。裕福な家の出であった Lowell は洗練された紳士であり、出来上った学者であり、Harvard 大学の教授であったし、後には Spain 公使や英国公使もやった人だ。そして機智と humor に富み、身だしなみはよく、礼儀正しい人であった。

一方 Thoreau はどうかというと、Harvard で大学教育を受けはしたが、元来貧乏な鉛筆製造人の息子で、その身なりや態度はまるで拙人^{そまひと}や田舎者のそれであり、森人^{まきこり}達や樵夫^{まきこり}達とは気心がよく合い、近路には垣を飛び越えもするし、野をゆく時は鑄掛屋に間違えられもするし、野生の動植物を研究するためには路辺に平気で腰を降ろすといった野人であった。そして人とはあまり打ち溶けて話をすることが出来ないし、婦人達との交際などもとより落付いて出来ないので避けていたようであった。

しかしその野人の胸の内には Lowell ほどの人物でさえ見ぬくことの出来ない深いもの、崇高なものをもっていたのである。こんなに全く違った type の人間が本当に理解し得るのはなかなか難しい事であった。

Eugene Benson はこの Lowell の Thoreau 批判を読んで、*Galaxy*. vol. 2 (September, 1866) 80—81. において Lowell に答えている。その大意は次のようである。

「私は Carlyle 論以後この批評を見る迄は Lowell が好きであった。しかし American Philistines に反対した最も非難する所のない真面目な文人に対して、外国や地方の規範的なものから最も独立していた人に対して、また Emerson と共に delectantism の威信を最もよく破壊した人に対して非難し、判決をいい渡すために Lowell はその wit や humor やその文学的名声の威信を貸している。Thoreau を批評したから責めるの

じゃない。彼を責めるのは彼が独善的な Thoreau 非難者達の群中に立ったからだ。Lowell が商人達や役人達や講師達や工場主達の側に立って彼等の考えを述べたからだ。なるほど Lowell は Thoreau より余計に芸術家風であったし、Thoreau が優しさや、丁寧さや懇懇さを欠いていたので彼が心を乱されたのだから、ああした批評をしたのも理解できるけれど、文学上の検事総長のように Thoreau を審問起訴したその行動を私は悲しむ。Thoreau はアメリカの俗人達という暴君を恨むに急であった文人だったし、わが国生えぬきの文学の中にまだ示さねばならない最も生えぬきの成長を愛する人であったから。」

III

ここで Lowell が Thoreau を如何に批評したかを見てみよう。

当初に述べたように、*A Fable for Critics* 中の blank で Thoreau と想われる人物を Emerson の追随者として暗示してはいるが、もともと Thoreau とは Harvard 大学では同窓であったし、大学を終えた後も友人としての間柄であったし、1849年に *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* が出版された時には、特に非難したようでもなく、むしろ *Massachusetts Quarterly* 中で Thoreau のことを wild nature の魅力を感じて、それを表現し得る稀れな人の一人として高く賞讃しているし、個人的な友情のある調子がうかがわれた。

しかしながら10年程の後、当時 Lowell が編集していた *Atlantic Monthly* に Thoreau が寄稿した原稿の一部を、前述したように、削除したために不和を生じ、この二人の友情も遂に終りを告げたのであった。

かくして Lowell が *North American Review*, vol. 101, (October, 1865) に掲載した Thoreau 論には、この不和が多分に影響していると見られるのであるが、Salt はそれについて「敵意ある風刺と巧妙な誤説の傑作で、極めて手際よく華かに書かれている」といつている。果してそうか、

少し詳細に互って吟味してみよう。

この Lowell の Thoreau 論は、Thoreau の死後にその妹の Sophia や Ellery Channing や Emerson のような親類や友人達が面倒を見て遺作が次々と出版されたが、出た順に Thoreau の著作 6 巻を読了して、批評家としてまた読者として、それ等の印象について適当な報告をしたくて書いたもので、まずこういつている。

「Emerson の花粉によって実を結ぶようにされた雌蕊だけの植物の内、Thoreau はかくたち離れて顕著である。彼の遺作が Emerson に依って吾々に提供されるのは何か非常に適しいのである。というのもそれ等の作品は Emerson 自身の庭から採ったいちごだからだ。」

これは 1848 年に Lowell が “——” で Thoreau と想われる人物を暗示して歌ったあの詩と同じ考え方で、長い年月を経た後もやはり Thoreau を Emerson の追随者、模倣者というように見て居るのである。

なるほど Thoreau と Emerson との間には類似点があるのは否定できない。あれほど親しくして、同居までしていたのだから、Emerson が Thoreau にある程度影響したのはいうまでもない。しかし Thoreau が Emerson の唯の弟子であったとか追随者に過ぎなかったと見るのは誤りだとする者が段々と出て来た。ある作家達が Thoreau の哲学は全て Emerson の “Nature” についての講義によって鼓吹されたのだと断言すると、それに対して反対するものがある。即ち、Thoreau の哲学が非常に確立してくるまでは、彼は “Nature” を知らなかったというのである。

Emerson が彼と接する多くの人々に非常に微妙な抗し難い影響を与えた事は疑う余地もない。その磁力に曳かれて彼を訪れ、その態度や身振りまで故意でないとしても、まねる者があったといわれている。そして Emerson は Thoreau が生きていた時代のアメリカにおいて、最も審美的、独創的そして超越的な心をもっていて、それが不思議に麗しく魅力ある人格で統一されていたといわれている。Emerson より早く死にはしたが 16

才も年下であった Thoreau が色々な点で Emerson の影響を受けていたと見るのは誰しも普通に考えることであろう。しかし彼が単なる模倣者であるとか、その思想も哲学も作品も、この偉大なる光の単なる反映に過ぎぬということを信ずる訳にいかないと抗議する者が次々に出た。

Gilbert P. Coleman はその “*Thoreau and His Critics*” 中において「その二人は多くの外面的な様相においてはよく似ていたが、多くの本質的なものにおいては両極であった。Emerson は彼の友 (Thoreau) が独創的な天才だということを頑として主張したように、Thoreau が単なる弟子だという考えには Emerson 自ら温かく憤慨している。」

とっていると共に Emerson の息子の “*Emerson in Concord*” 中の言葉 (A) と Dr. Holmes が “*Life of Emerson*” 中で述べてる言葉 (B) を引用している。

(A) 「Thoreau は意識した模倣は出来なかった。彼の欠点がありとすれば、正しく反対の方向にあった。」

(B) 「Thoreau は彼 (Emerson) に、驚くほどに微妙な感覚器官の新しいセットを貸し与えた。Emerson は詩人として自然をながめた。そしてその natural history はもし彼自身にまかせていたら、Polonius のそれと同じようにばくたるものであったろう。……Emerson は彼と長く親しくしていたので、多くの自然物に outline を与えることを教わった。この仲間がなかったら、自然物も彼にとっては詩的にぼんやりと見えたことであろう。」

Lowell はまた「彼はうぬぼれがとて強い人であつたらしく、その性格の欠点や弱点を彼にとって独特な美德であり、力であると、自分で究明することもしないで、信じ込み、吾々にも信ずるようにいい張っている。」といているが、これは前述の “*Atlantic*” で削除して問題になった、“It is as immortal as I am……” などにも関係があるように思われる。し

かし Thoreau はあの文句で高慢にも自分の偉大さや、業績の不滅を誇った訳でもあるまい。軽く見れば humor のあるいい方だし、深くみれば、汎ねき宇宙の靈気の中に立つ己が信念を体得した彼のこと故、Lowell のように通俗的な意味でうぬぼれが強かったとするのはたいへんな誤である。

また Lowell 曰く、

「Thoreau は怠惰であったのか、人類の他の者達の心をひきつけたり、精出させたりするどんな仕事も彼にとっては無価値なものとする。彼は成し遂げる性質が欠けていたのか、成功なんていうものこそ軽蔑すべきもので、持続性や目的を欠いているのは自分自身ではないと。彼は貧乏だったのか、金はまぎれもない邪悪なものであった。彼の生活が利己的なものと思われたか、彼は善をなすことは迷信の中でも最も貧弱なものの一つだと非難する。……彼は外から見て一般的な何の才能も持っていなかった。あるいは少くともそういう材料を供給する何の経験ももっていなかった。そして彼は自分自身のむら気を宇宙の法則とし、自分自身の山脈を宇宙の水平線としている。」と。

なるほど Lowell のように世間的にも成功した人から見れば、Thoreau は無能な男に見えたであろう。しかし、唯そうした外的世俗的な見方だけでは人間を批評することは出来ない。学生に一般的優等生になることを望む教授のような物のいい方はおかしい。仮令一般人に対してはそれを望んでよいとしても、Thoreau のような人は例外である。また、評価に当っては、こうした普通の物差で計ろうとするのが間違っているのである。Eugene Benson が Lowell を責めたのは正しくこうした点においてであった。

Lowell に依れば、

「Thoreau は感受性は強かったが活発な想像力を欠き、理解力は高度にもっていたが批判力は心の永続性の欠乏の為め非常に限定されており、且つ不充分であった。彼にはすっきりした釣合のとれた完成状態にまとめて

ゆく芸術的熟達さを何等もたなかった。しかし sentences や paragraphs の形造りの精巧な機械的熟練を、あるいは分離した思想や感情や image を表現する sense を（これは更に稀れなことだったが）ほんのちよっぴりもってるだけ。」というのだ。

Thoreau の傾向として伝統や既成の芸術的熟達さや所謂完成状態という事を余り念頭に置かなかった。否むしろそれを破ろうとしたともいえよう。だから彼にそれを望むのは無理であろう。しかし孜孜として書き続けた心の覚書には彼独特の style があり、彼なりの未完成の完成ともいえるものがある。それが Thoreau 文字だ。それは要するに Thoreau の生活から来る息吹そのものであった。それこそ Thoreau の生命のリズムであったのだ。ここにも Thoreau に対しては新しい特別な文学的物差が必要である。Lowell が彼の感受性が強く理解力が高度であったのを認めたのはよいが想像力を欠き批判力は限定されて不充分であったといっているけれど、そういう事を見る人の如何によって随分違うことであり、sentences や paragraphs の熟練さや思想感情の image 表現の sense が稀れにちよっぴりあったという批評なども適当とは思われない。

Lowell はいう。

「Thoreau は生来の観察者ではなかったし、naturalist である程に詩人でなかった。彼の注意力にしても天才にしても天性のものではなく、彼は何ものをも発見しなかったのに、何んでも身分の発見だと思った、これは彼の性格の欠点であるが、作家としての彼の主な魅力の一つである。」と。そして生来の観察者でなかった理由として、彼が Walden の小舎を建てる迄は hichory が Concord に生えてるのを知らなかったとか、Maine へ行く迄は燐光を発する森を見たことがなかった。大概の田舎の小供達には早くから馴染みある現象だのにとかいつている。どんなに観察力の鋭い人だってもものによっては永く見逃して気づかずに居ることも当然あることだし、何でも自分で発見したと思うことをそのまま表現しているのは、正

直ものの憎めない所ではないだろうか。naturalist であるほどに詩人ではなかったというけれど、単なる naturalist であるよりは、哲人であり、真正の詩人であったとさえいべきかも知れない。

「彼は東洋文学について語り得る人は Concord に一人もいないと “Walden” 中で不平をいった。所で彼にそれを紹介した人が彼の小舎から二マイル以内の所に住んでいたのだ。」と Thoreau の知的利己主義を Lowell は非難している。

しかし Thoreau が東洋文学に親しみ東洋思想の真諦に深く通じていた点においては Emerson よりも勝っていたので、これについては拙論の「東洋思想と H. D. Thoreau の文学」や「H. D. Thoreau と R. W. Emerson との関係」等を参照して下さいと思えますが、Thoreau が東洋文学について語り得る人が Concord に一人もいないと不平をいったとて、それを知的利己主義などと Lowell のように非難するのもおかしいものである。

Lowell は言う。

「人が特許権をもてるように絶対的な originality というこの考えはおかしいものである。人間は思想においても、言葉におけると同じように過去及び現在から遁れることは出来ない。何人もまだ一語だって発明はしない。でも言葉は何んとなく、一般的な貢献と必要によって成長する。これは思想についても同じである。…………… Originality は思想を消化理解する力にある。それで吾々の生命となり、肉体となる。例えば Montaigne はあらゆる方面の考えを自由に取り入れたが、最も独創的な文人の一人である。それ等のものは血となり、彼の style の色彩となっている。そしてその顔色を鮮かにしているが、永久に charming である。Thoreau においては未だ外国的で不同化的なのがひどく眼につく、不消化の徴候を自から示している。」と。

Lowell は Thoreau には originality がなかったといわんとしたので

あるが、originality なるものは他人の思想を消理解する力にあるとしている。Thoreau には果して思想を消理解する力がなかったのであろうか。彼は既に Thoreau が極めて理解力に富み秀れていたことを確言しているので、自家撞着も甚だしいと思う。

なお他人の思想を仮令よく消理解したとて、それが直ちに originality だとはいえないと思う。originality が生れてくるよい下地にはなるであろう。その場合は普通型、常識型、努力型である。しかし真の originality というものは、やはり、inspiration というものが多くの場合必要だと思う。それが突破口を開いてこそ originality の花も咲くのである。inspiration を天性多分に感受する人もあり、精進練磨の結果感受力を強める人もある。世俗的な仕事に煩わされずに、自然に親しんだり、静かに読書したり、冥想したりして、外面的にはまるで怠け者のようであり、世間の落伍者のようでも、実はさにあらずして、精神的には孜孜として難行苦行をしている。そういう者にはやはり inspiration の湧いてくる度合は強いのである。そして original な思想を産み、生活や行動さえもそれにつれて変わったものになる場合がある。Thoreau はこういった人であった。

「Thoreau は外国的で不同化的なのがひどく眼につく、不消化の徴候を自から示している。」というけれど、Thoreau は非常に博覧強記で、古今東西の書に親しみ、殊に東洋の聖典には——仮令、原典によってではなく翻訳を通じてであっても——よく通じていた。従ってそれ等外国のものをしばしば引用しているので、それが Lowell の眼についたのであろうが、引用したとて不消化の徴候と見るのは早計である。外国のものをそれと明示せず、自分のものであるかのように述べることこそ咎むべきで、その引用が如何に自分のいわんとする所を助けているかが問題なのである。

Lowell はいう、

「彼の人生論の根本的な欠点は彼が人々から肉体的に離れるのと精神的に離れるのを混同したことであった。人はもし仲間達の弱点にそまらず

に居れば、彼等から充分離れて居られる。もし彼等の力にあずかることを拒むなら、追放されたと同じ程には真に身を退くことにならない」また「人間の世界を試みる前に虚ろな価値なきものというのは病的な自己意識である。何か生れつきの弱点に気づいた者の本能的ないい遁れである。……健全な心をもったものにとっては、この世は好機への絶えざる挑戦である。Thoreau 氏は健全な心をもっていなかったか、あるいは処方箋をあまり好まなかったのだろう。彼の全生涯は医者を探すことであった。」と、

Lowell は Thoreau の人生論の根本的な欠点は、彼が肉体的に離れるのと精神的に離れるのを混同したことだといっているけれど、Thoreau の Walden 中の次の一節を示せば、Lowell の誤は一目瞭然である。

“Solitude is not measured by the miles of space that intervene between a man and his fellows. The really diligent student in one of the crowded hives of Cambridge College is as solitary as a dervish in the desert.”

Thoreau は決してそんな混同はしなかった。「人が苦し仲間達の弱点に染まらずに居れば」などというのは、如何にも幼稚な生徒指導に使う心掛けみたいなものだし、消極的である。Lowell には Thoreau が森の小舎に暫し退いて生活したその真の目的意義など毛頭分っていなかったようだ。

「人間の世界を試みる前に虚ろな価値なきものというのは病的な自己意識だ」というけれど、Thoreau は決してそんな悲観論者でも人間嫌いでもなかったし、心が不健全であったなどとは、とんでもないことだ。病人扱いにするのもほどがある。

なるほど、彼は一生結婚をしなかった。けれど彼に肉体的欠陥があったとは思われない。彼が女性に対して愛を感じなかった訳でもない。彼には心秘かに愛する人があったが、兄が愛しているのを知って、身を引いた尊いエピソードがある。自然に接することを好んだだけでもない。世間の多

くの者がそのために煩わされている余計なものを出来るだけ去って、彼の簡易生活の哲学を実行したかったのだ。そして静かに古今東西の聖哲が残した文に親しみ、自らの心を視つめたのであった。

「健全な心をもったものにとってはこの世は好機への絶えざる挑戦である」という Lowell の言葉は普通の世人に対する場合、よい激励の言葉である。とって、世間の榮達の野心をもっていなかったとしても、Thoreau を不健全であったときめつける訳には行かぬ。Lowell の論法をもってすれば、古今東西の聖哲で不健全だといわれなければならぬ者がどんなに多くなることであろう。世間の榮達などを眼にもくれず女色をも慎んだ多くの聖哲や宗教家は、果して心が不健全であったろうか。世には一般的通俗的な人間と、特殊な精神的精進をする人間とがある。こうした特別な種類の人間は一般人と異った所が色々あってもよいので、一見病的に見えてもさにあらず、極めて健全頑強な心の持主なのだ。大学の教師を長くすると得て全般的に通用するよいことをいい勝ちで、特別の人に対して理解を欠くことがままある。Lowell もここではその欠点を表わしている。その上、例の先入主が格別に彼の筆を操っているように思われる。

Lowell はまた「Thoreau は何ら humor を持っていなかった。そしてこの事は彼が貧弱な論者であったことを意味する。」といているが、果してそうであったろうか。

Gilbert P. Coleman はその '*Thoreau and His Critics*' で次のように Lowell の説とは全く反対の事をいっている。

「Thoreau の批評家達の多くの主な誤は、Thoreau が humor や大げさな方、誇張を好んだことを彼等が見逃した事である。彼等は Thoreau を文字通りに受けとる。Thoreau はその本を通して同じようにその生活を通して読まれるべきである。彼の書いてるものの多くは努力して逆説で書かれている。彼は明白な誇張家である。彼には表面は魅力ある無邪気な自慢が沢山ある。だがそれは唯表面だけのことである。裏面において見出

すのは愛すべき友人であり、しばしば真の哲学者であり、説教者であり、道徳家であり、物語手であり、就中、何を差し置いても、humorist であることを見るのである。……………彼の humor は批評家が認めなければならない本質的なものである。Thoreau のような humor をもつ者は何人も隠者であるとか、厭世家であるとかいわれないし、また社会を破壊しようとする誇張した逆説的な欲望を真に真面目にもっていたとかはいわれない。これは彼の最上の天才的性質であり、彼をして極めて人間的且つ極めて説得力があるようにしている性質である。」

Lowell はまた曰く。

「彼はミンクやマーモットを念入りに注意して研究している間に自分の国がその場面であり、その幕がもう既にあがっていたところの厳肅な運命劇を全く侮蔑をもって眺めた。」と。

しかし Thoreau に対してこれくらい不当な酷評はあるまい。Thoreau の晩年に国を動揺させたあの大きな政治問題に関する Thoreau の見解と活動を少しでも知っている者だったらこんなことを書き得ない筈だ。

たとえ晩年は保守的になったとはいえ、奴隷反対運動の闘士だった Maria White と結婚して、自らもその運動の為に筆をとった、Lowell が奴隷に対する Thoreau の態度を知らなかったなんてことがあり得るだろうか。Thoreau が税金支払拒絶までしたのは何故だったろう。John Brown に関する彼の演説を知らなかったなんてことがあり得るだろうか。Thoreau は実際政治嫌いではあったが、自分の国を場面とする the august drama of destiny を侮蔑の眼で見たというのは確かに誤も甚だしい。

Thoreau は侮蔑の眼で見なかったばかりでなく、反対に劇中で役を演じたのである。しかも偉大な精神と熱意をもっていた役者であったというべきだ。

Salt も “There is not the least justification for Lowell’s statement ……” といって居り、なお、もし Thoreau が健康で生きていたら、あんな

なに多くの者にとってそうだったように、あの Civil War が彼にどんな全く新しい姿をもたらしたか何もいえないのであると、付け加えている。

(*Life and Writings of Henry David Thoreau*. P. 144)

今度は自然に対する Thoreau の態度について、Lowell がいつてる所を吟味してみよう。

「鳴いてる鳥のような自然人は、自然の熊や野生の猫がそこに留まるように必然的に森から出てくる。自然的たらんと求めるのは全ての自然を永久に禁ずる意識を意味する。もし人が自然たらんと目ざさなければ、沼地に置けると同じように客間にあっても自然たり得るし、またそれ以上に自然であることはない。というのも吾々が不自然と呼ぶものは常に人が己自身について余りにも考えすぎることにその根源があるからだ。」

こう述べた後で Lowell は Turgot の “It is impossible for a vulgar man to be simple.” という文句を引用している。そして、

「私は近頃の自然に対する感傷主義の多くは、病弊の印であると見てゐる。」

と続けている。これを要するに Lowell のいう自然人は普通の社会人となることだし、物を余り考えないことだ、しかしここで Turgot の文句を引用したその真意は果して何処にあるのだろうか。

Thoreau は simple life の哲学を力説した人であり、simple たり得ない vulgar man に警告を發したのであるが、Lowell のこの引用は（逆必ずしも真ならずであるにも拘らず）深く考えて、simple たり得ないものは vulgar man だ。Thoreau は深く考えたが故に simple たり得なかった。つまりは vulgar man だと皮肉にも暗示しようとして居るようにさえ思われる。Thoreau が人里離れた Walden 湖畔の小舎で唯一人生活したのも、そういう孤濁の生活を理想とした訳ではないし、また、世を厭い、世をはかなんだ為めでもない。人間の生活の再吟味のためだし、自然を視つめ、己を視つめる修行の為めなのであった。だからこそ彼は二年とニヶ

月で再び普通の社会に帰っているのである。Lowell の論は一般普通人に向っては至極妥当な意見と思うが、最も自然人たらしめた Thoreau を自然人ではないと思わせたり、深く考えたが故に vulgar man だと皮肉るならば大きな誤といえよう。

「Petrarch 以来隠遁して自然に親しむことにその熱情を最も声高く宣伝している人々は、大概感傷家であり、非現実的な人間であり、女系における人間嫌いであり、彼等の性質について侮蔑を表わすことによって彼等自身についての不安な疑惑を慰めている。彼等は彼等自身の価値についての彼等の内的物差に比例して、前もって世間に要求をする。そして行為について眼に見える物差によってのみ世界が支払っていると怒っている。それはその流派の近代的創始者 Rousseau について真実であり、彼の知的子供である Saint Pierre について真実であり、また彼の孫息子であり大方そうやってよいだろうが、原始林の発見者であり、森の風もない静寂の内に自然に朽ちておごそかにも倒れる光景に初めて感動した Châteaubriand について真実である。」

かく Lowell は自然に対する感傷主義の多くは病弊の印だと見たし、自然に親しみ自然を称え自然に帰れと叫び、自然に即した生活を望み実践した人々を軽んじた。そして彼等は眼に見える物差で価値を計られることを怒ったといっているが、Lowell も一般人と等しく彼等を、また、この Thoreau をも、そうした一般用の物差で計ろうとした。もつと直接的な支払のことに言及すれば Thoreau が *Atlantic Monthly* に送った原稿に対してなかなか支払われなかったらしく、世間が Thoreau を求める声につれて支払うことが約束されたようである。

「大自然の神聖な生命は、大自然の作れる如何なる他のものよりも人間において一層驚くべきものであり、一層多様であり、一層荘厳である。Montaigne や Shakespeare の如く人々との交渉によって得た智慧、あるいは Dante の如く人々の中であって己が魂との交渉によって得た智慧は、

全てのものの中でも最も貴重であると同じように、最も喜ばしいものである。外界自然においても吾々に興味あるのはやはり人間である。そして、吾々は Wordsworth や Thoreau の眼のような詩的な眼で見るやり方や、また彼等がそこに投げた反省に依って、物を見るよりは遙かに頓着しない物を見る。人が外界世界に自分自身の image を見るという単純な事実について、しばしば騒がれてるのを聞くと、人間が鏡の中に自分の姿をちらつと始めて見た時の野蛮人を憶い出すのである。」

Lowell のこの文節は全くその通りだといわねばならない。しかし人間にとって最も親しく最も関係深いものが人間だから、そして、何より人間自身であるから、人間は人間の生命を最も驚くべきもの、何よりも荘厳なものとしているのであろうが、人間は自らを尊ぶと共に他の色々な生命の尊いことも忘れてはならない。そしてその全ての生命の根源である大自然の尊さ有難さを何より忘れてはならない。Lowell はそういう根本的なことに思いを致す Thoreau の真意が分ったであろうか。

「唯一人自然と交ることは Thoreau の人格に健康なあるいは心地よい影響を与えたとは思われない。……もし彼が仲間達ともつと親しくしていたら、同情は深まって、彼独特の天才は彼が夢みたよりも一層尊重され、彼の作品は一層多くの読者層を、少くとも一人の一層温い読者を得たことは確かであろう。吾々は彼の気質の生来の優しさ、真摯さ、気高さに対する最高の証言（註、これは Thoreau の葬式の時の Emerson の頌徳文或は *The Excursions* の序言とした伝記的 Sketch 中にあるもの）があるし、また彼の精神の類稀れな性質については、彼の色々な本の中に同じように否定出来ない証言がある。」

Lowell はかく Thoreau の類稀れな精神がその色々な本の随所に現われているのを結局認めざるを得なかった。にも拘らずなお彼は Thoreau が一人自然に接していたため冷たくなったのだ。もつと人と親しくしていたら、その天才が尊重され、その作品がもつと広く読まれただろうといっ

ている。これもうなずける。しかし、“at least, a warmer one” とは Lowell が自分自身をさしているのだと思われるので、彼は Thoreau が冷たいというので類稀な天才にも拘らず、またその作品にはその類稀な精神を表現していたにも拘らず、これをひどく冷酷に批評したのは、結局 Lowell 自から、感情に支配されていた事を告白していることになる。一人自然に接していたが故に Thoreau の心が冷たかったとはいつているものの “*Atlantic monthly*” の削除問題で損ねた感情は、この場合もなお底に燻ぶっているように感じられる。

確かに Thoreau は普通人のようにやたらに人との交際を好んだ訳でもなく、情熱的な恋愛や温い家庭生活や一般人の生活を好んで描いた訳でもない。静かに書を読み、自然に接し、己を視つめて、深く人生を考え、世の人が如何に誤った生活をしているかを力説したので一見冷たくはあったし、Lowell のいうように、cynical に見えたでもあろう。しかし彼は友情にも厚かったし、人間嫌いでもなく、ましてやこの世の中を厭うたり、同胞愛を欠いたために、それを侮蔑の眼で見たのではない。American Philistines の誤れる態度を嘆いたのである。

「あらゆる例外を除けば、Thoreau の作品はその種類において比肩するものなく、その最良の所では程度においても比肩するものがない。つまり、Thoreau のが受売りの Orientalism のこんがらがった根や枯葉から離脱して、清くなめらかに流れ、流れつつ広まっている所では、両世界においてなんでも偉大なもの、美しいものを映す鏡である。」

と Lowell はいっているが、Thoreau のが種類において、また程度において、無比であるということ、また、Orientalism を離脱した時の美しさを賞讃するのによいが、Thoreau が如何に Orientalism に影響されていたか、それによって彼が如何に大自然と人間との融合といった神秘的な世界へ入って、物心一如の境地に達したかを知らなかったのであろうか。何れにしても、それを問題にしなかったことは重大な手落ちである。これは

「受売り」などといってすまされるものではない。宇宙の真理は真理であり、人間の心の靈妙さは東西を問わず、古今を問わず、師と弟子を問わない。体得してこそ尊いのである。Wendell Glick によって編纂された 'The Recognition of Thoreau' 中には諸家の Thoreau 論が色々集められているが、Thoreau の Orientalism を調べた A.E. Christy のものは狭い研究だという理由で掲載されていない。もしこの編者の Glick 氏が Thoreau と Orientalism とが如何に重要な関係にあったかを本当に理解していたら、屹度 Christy の論文は勿論のこと、前述の拙稿をも英訳して掲載したに違いない。

「彼の文学は広汎且つ深遠であった。彼の引用するものは常に最も純良なる天然の金塊であった。彼の文にはその国語で書いた如何なるものとも同じように完全なものを見る。……彼は Donne や Browne や Novalis の部類である。本来の独創的な人々の類でないとしても、ほとんどそれに劣らぬ程度で特殊なものであり、且つ菌朶のように、その葉が眼に見えない思想の種を撒き散らす部類に属している。」

かく Lowell はその評論の最後においては、この程度の賞讃をもって結んでいるが、それに到る少し前で、

“We think greater compression would have done more for his fame.”

といっているが、Thoreau の名声はこの Lowell の批判後一体どうなったであろうか。

IV

Thoreau の死後4年間における Ticknor and Fields による刊行は、1863年に *Excursions*, 1864年に *The Maine Woods*, 1865年に *Cape Cod*, 同じく 1865年に *Letters to Various Persons*, それと 1866年の *A Yankee In Canada With Anti-Slavery and Reform Papers* であったが、これ

等に対して少なくとも 36 人の批評家がいると John Broderick は示している。その多くは作者のことを奇行の傷を持った transcendental naturalist だといった。1866 年の Walden 再版、1893-94 年には Thoreau の作品の the Riverside Edition が出版されたし、1872 年に Bronson Alcott の “Thoreau” (*Concord Days*, 1872) や 1873 年には Ellery Channing の ‘Thoreau, the Poet-Naturalist’, 1882 年には F. B. Sanborn の “Thoreau” 等が出たけれどあの Lowell のひどい批評はその力がなお強く、Robert Louis Stevenson が *Cornhill Magazine*, vol. 41 (June, 1880) での ‘Henry David Thoreau: His Character and Opinions’ でもって ‘Skulker’ だと非難の合鍵を打った時、Thoreau に対する評価は最低点に達していた。学究的批評家達も余り取り立てていう程の成果はなく、Charles Richardson (1887) は Thoreau を Emerson の薄い影とし、Walter Bronson は *Short History of American Literature* (1900) で Thoreau を “Minor authors” の中に入れたし、G. E. Woodberry も Richard T. Burton も W. C. Bromnneil もその著作では Thoreau を省略した。W. B. Cairns は彼の *History of American Literature* (1912) 中で、

「名声が着々増加している少数のアメリカ作家中の一人だが、その奇行が彼を最大のアメリカ随筆家にランクすることを妨げている。」

といている。

大方のアメリカ文学史家はあの Lowell の批評に影響されるか、それまでの批評家の大勢に倣うかで、特に自分の見識でもって Thoreau を発見し得るものは余りなかった。

英国の H. A. Page は ‘Thoreau: His Life and Aims’ (1877) で「Thoreau は病的に利己主義者で、感傷家で、孤独者であった。」といわれているその誤解を解こうとした。また Stevenson が Thoreau を ‘negative superiorities の人間として書いた時、その非難を取消すよう忠告した。しかし

Thoreau に対するひどい先入観を去って色々な面でその名声を高めてゆくのに力があつたのは同じく英国の H.S. Salt で、彼はその *The Life of Henry David Thoreau* (1890) で新しい態度で Thoreau を取扱つた。またその頃アメリカでは Samuel A. Jones は eternity を理解把握しようとして一生をかけて精進した類稀れな、血と肉をもつた人の作品を読むよう同胞に勧告した。1901年には Thoreau に関する最初の批評集 *'Pertaining to Thoreau'* が Jones によって編集刊行された。Gilbert Coleman は 1906年にその *'Thoreau and His Critics'* において

「恐らく America の如何なる作家も Thoreau ほどに名声に対する確乎たる基礎をもつ者はないであろう。彼は勝ち得たる路を一步一步手に入れているのだ。彼にはブームはなかつた。彼には助太刀は少なく、誤解と鑑賞の欠乏との奇妙な結合に対して闘わなければならなかつたし、また、ある場合には、個人的偏見によって吹き込まれたといわれる誤説と闘わなければならなかつた。」

といい、また、

「Thoreau はアメリカ文学にとってばかりでなく、全文学にとって余りにも価値ある財産なので、如何に機智があり、華かな批評家によつても、認識力のない皮相な態度では取扱われ得ない。彼は容易に理解されない複雑な天性をもつた人であり、また彼の vision で見ることは時として困難である。批評的精神で彼を研究したい人々は注意と同情をもつて研究すべきだというのはこの理由の爲めである。彼の場合は、気高い精神と機智に富み、靈感を与える心、及び大きな価値と魅力のある道徳力とが一人の人間の内に共に備っている処の文学で知られている稀な例の一つである。……同情あり、鑑賞眼ある精神で Thoreau の本を手にする読者には彼がよりよい人間として感ぜられるようになるだろう。……また独断や信条にこだわらないで、充分あらゆる宗派を抱擁するにたる宗教を見出すであろう。“正しく生き、決して正規を逸せず、またよく知られている原罪

の洪水の外に、原善の一雫を吾々自身の内に持っていると信ずる。—これ等の歌の調べは Thoreau の作品中に見うけるのである。”吾々は全ての人々が Thoreau のようであることを欲しはしない。そこまで理想的な発達段階に文明は到達していない。しかし吾々は全ての人々が幾分でも Thoreau のようであることを望みたい。」と Coleman は結んでいる。

また Mark Van Doren はその '*Henry David Thoreau, A Critical Study*' を 1916 年に書き、naturalist としてよりも philosopher としてその性格や一般的意義を解明しようとした。1917 年に Archibald MacMechan は *The Cambridge History of American Literature* 中で Walden の価値を示した。またやはり Thoreau 生誕 100 年祭に当るこの年に Norman Foerster は '*The Humanism of Thoreau*' を書いたが、これは最も予言的且つ正当なことを時日が証明している。この頃迄の約 50 年は多くの Thoreau 批評家達は大なり小なり Emerson や Lowell の意見に左右されていたが、Foerster はその鋭い批評眼をもつて Thoreau の精神と芸術の色々な面を見識をもって照し出した。

“He has been regarded as an American Diogenes and a rural Barnum; as a narrow Puritan, a rebel against Puritanism, and a German-Puritan romanticist; as a poet-naturalist; as a sentimentalist; as a hermit; as a loafer; as a poser; as a prig and skulker; as a cynic; as a stoic; as an epicurean. Certainly he is not all of these; possibly he is several of them, or none of them—something else, rather. The one encouraging fact is that he is, permanently, what he is. Our task, therefore, a century after his birth, is still in the main one of discovery.” (*The Humanism of Thoreau* by Norman Foerster. *Nation*, Vol. 105. July 5. 1917.)

彼は以上のように述べて研究を続け、1917 年から 1923 年迄に 4 つの評

論を出版した。かくしてそれまで Thoreau につけられた色々な合言葉は急に廃れるようになった。

彼の外に洞察的な N.C. Wyeth や、Thoreau の生活態度に眼をつけた Odell Shepard 等が Thoreau について書き、1920年代 1930年代には Thoreau の天才の色々な面の認識が深められ、名声も大分高まった。1930年に V.L. Parrington は政治経済の面から Thoreau の思想を分析した。また A.E. Christy は彼の Orientalism を研究したし、Canby は Thoreau を偉大な人間であり、偉大な作家だと称えている。(‘a great writer as well as a great man’. *A Study of Eminent American Writers from Irving to Whitman* 1931.) またその Thoreau 伝 (1939) はベストセラーになった。*American Renaissance* (1941) では Matthiessen 等が Thoreau の天才を色々な面から研究した。

最近では Raymond Adams, Joseph Wood Krutch, Reginald Cook それに S. S. Hyman 等各々立派な学者的研究者がその研究を発表している。Charles R. Anderson はその著書 ‘*The Magic Circle of Walden*’ (1968) において、あの今では押しも押されもせぬ堂々たるアメリカの古典となっている Walden を prose で書かれた詩のように考えて、面白く、革命的な解明を試みている。そして自然についての智識では実に博く、人間や社会についての理解は鋭く、その人格や行為は非常に特異なものであった Thoreau は、散文における詩人としてその独創性を更に顕著に示しているというのである。そして5巻の formal works に15巻の journals を加えた Thoreau の全集20巻はもとより、Thoreau が読んだ広汎な書物や彼の生活の全記録をも彼の傑作 Walden に光を投げるために利用しているようである。

Vassar College の教授である John Aldrich Christie は ‘*Thoreau as World Traveler*’ (1965) と題する本を出したが、それは扉裏に Thoreau の microcosm と macrocosm を掲げて居り、“Live at home like a

traveler”。と Thoreau がその一友に勧めたように、実際には余りそう遠くへ度々旅行もしてないが、読書や思考想像によって旅行した世界は広く、しかも常に Concord の己が小宇宙に帰って静かに冥想した Thoreau の世界旅行について書き、これに種々な挿絵を加えている興味ある本である。

1962年の Thoreau 死後百年祭に当っては米国はもとより世界各地で Thoreau を称える記念祭が举行され、また特輯を出した雑誌もあり、記念出版の本もあった。

日本でも『英語青年』はその特輯号を出し、アメリカ文学会や大学の英文科等では記念講演会を催した処があちこちにあった。吾が立正女子大学でもその記念講演会を举行して、私は「Thoreau の文学と東洋思想」と題して講演した。

The Massachusetts Review は “A Centenary Gathering for Henry David Thoreau” の題下に編集掲載したがそれは後に新しい二つの論説と一つの詩を追加して、1968年に “Thoreau in Our Season” として出版された。

また、初め1908年に出版された ‘A Bibliography of Henry David Thoreau’ は1968年に再版された。1967年は生後150年祭に当たるのでまとも色々 Thoreau を賞讃する催しがあり、それを記念する論文の出版があったようだ。

V

以上 Lowell 以来の Thoreau 研究を回顧的に概観した訳であるが、いかに年と共にその研究が隆盛になり、いかに年と共に Thoreau の真の姿が益々よく解明され、それにつれて Thoreau の名声がいかに高まって来たかが分るのである。

1962年の Thoreau 死後百年祭の時、彼は New York University Hall of Fame for Great Americans に入れられたのであるが、その時に

Raymond Adams 教授が述べたように、その日こそ ‘the day Thoreau didn’t die’ であったのだ。

ところが、百年位前にかく冷酷に Thoreau を批判した Lowell の評判はどうなのであろうか。一年一年と名声を高くして来た Thoreau に対して、Lowell の名声は次第に減退している。Glick は ‘*The Recognition of Thoreau*’ の Preface で Thoreau の卓越権を拒むために Lowell が支払った代価は、少くともある程度は、恐らく、自分のを犠牲にしているであろうと次のように述べている。

「今世紀における Lowell と Thoreau の名声の動きに逆の相互関係のあるのを説明するには、何か偶然の一致以上のものが要される。皮肉にも Thoreau は Lowell が批評家として裁かれる試金石の一つである。Lowell の現今の名声の棺の最も目立った釘の一つは彼が Thoreau の天才を誇ったことである。」